

高齢者理解を目的としたライフインタビューの効果 ： エイジズムをアウトカムとした学びの分析（ 研究報告）

| | |
|-----|---|
| 著者 | 簗原 文子, 畑野 相子 |
| 雑誌名 | 滋賀医科大学看護学ジャーナル |
| 巻 | 12 |
| 号 | 1 |
| ページ | 27-30 |
| 発行年 | 2014-03-10 |
| URL | http://hdl.handle.net/10422/5758 |

—研究報告—

高齢者理解を目的としたライフインタビューの効果

—エイジズムをアウトカムとした学びの分析—

簗原文子，畑野相子

滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座(老年)

要旨

高齢者看護において、看護者のエイジズムを排し、高齢者の強みに目を向け対象者理解をすることが望まれている。そこで高齢者の生きてきた人生や、人間性に直に触れることが、高齢者の強みを理解することに繋がると考え、高齢者の発達課題の理解を目的とした科目にライフインタビューを取り入れた。そしてインタビューにおける高齢者の強みの理解と、エイジズム変化との関連を明らかにした。学生のインタビュー実施後の学びのレポートを、テキスト分析を用いて分析・単語の抽出を行い、FSA 上昇群と減少群ごとに、コレスポンデンス分析を用いて検証したところ、FSA 減少群において【生活・人生】の類似性が高いことが示唆された。高齢者の【生活・人生】について、学びを深める事が、高齢者の強みを理解することに繋がり、学生のエイジズム変化に影響を及ぼしていた。高齢者の生活や、人生についてより学びを深める事が出来るよう、ライフインタビュー課題提示時に聞き取り項目等の工夫をすることが、学生のエイジズムを減少させることに繋がる可能性が示唆された。

キーワード：高齢者理解、ライフインタビュー、エイジズム、強み、テキスト分析

はじめに

平成 23 年度老年人口の割合は 23.3%¹⁾となり、在宅や医療施設等における高齢者看護はますます重要となってきた。また国連総会で採択された「高齢者のための国連原則」を踏まえた看護を展開するためには、看護者のエイジズム(高齢者差別意識)を排し、高齢者の持っているパワー(生命力、英知、生きる技法など)のポジティブな側面に目を向け、対象者理解をすることが望まれる。しかし、核家族化の進んだ社会における看護学生は、高齢者と関わる体験が少なく、高齢者を理解することが困難であるとされている²⁾。

そこで、高齢者の生きてきた人生や、人間性に直に触れることが、高齢者の強みを理解することに繋がると考え、高齢者の発達課題の理解を目的とした科目にライフインタビュー(以下インタビュー)を取り入れた。本研究では、インタビューにおける高齢者の強みの理解と、エイジズム変化との関連を明

かにし、高齢者看護学の教授方法の基礎資料とした。

研究目的

学生の学びのレポートより、インタビューにおける高齢者の強みの理解と、エイジズム変化との関連を明らかにする。

研究方法

1. 調査対象

4 年制大学看護学科 2 回生 60 名とインタビュー実施後のレポートを調査対象とした。

2. 研究期間

2012 年 12 月から 2013 年 2 月に実施した。

3. 調査方法

1) インタビュー実施前後で、原田らの日本語版 Fraboni エイジズム尺度(FSA)短縮版 14 項目を実施した。そして学生独自に作成した記号を用

いてインタビュー前後の結果の照合を行った。

FSA は 5 点法で配点し、高得点になるほどエイジズムが高いとした。

2) ライフインタビューの学びのレポートのうち

「聞き取りを通して、高齢者をどのように捉えたのかを述べて下さい」に対する回答を、FSA 上昇群と減少群とに分けて SPSS Text Analysis for Surveys を用いてテキスト分析し、レポート内容を比較検討した。テキスト分析により、学生 1 人のレポート内に出現した単語と、対象学生全体でその単語が何回使用されたか明らかとなる。この手法では 1 人のレポート内に繰り返し単語が使用されても、その単語は 1 人につき 1 回とカウントされる。

3) テキスト分析により明らかとなった高頻出の単語について、表記上、対象学生を行に、頻出単語を列と配置し、その単語を選択していれば 1、しなければ 0 と表現する 01 型データのクロス集計表とみなし、コレスポンデンス分析を適用した。コレスポンデンス分析は 2 次元分割表で表される 2 つの変数のカテゴリーの中で似たものを探し分類する手法である。これにより複数の単語の類似度を指標に分類し、単語同士の関係を表した。統計解析には、IBM SPSS Statistics 22.0、SPSS Categories を使用した。また単語間の検証として、頻出された 25 語の単語を手掛かりに元のテキストデータに立ち返り、テキスト分析の結果が一致するかどうかを行った。

4. 倫理的配慮

研究対象者には、文書にて研究目的、自由意思による研究への参加、不参加による不利益からの保護、成績とは一切関係がないこと、プライバシー保護厳守について保障した。データは記号化し、個人が特定できないようにした。実施にあたり、滋賀医科大学倫理審査委員会にて承認を得て実施した。(承認番号 24-101)

結果

1. 対象者の属性

同意の得られた学びのレポート 60 名中、エイジズムの変化が見られなかったもの、記載漏れのあったもの、前後の照合ができなかったものを除外し、47 名(回収率 78%)を分析対象とした。エイジズムが低下した者は 33 名、上昇した者は 14 名だった。

2. 自由記述のテキスト分析により抽出された単語

47 名分の学びのレポートテキストから、名詞・動詞・形容詞・形容動詞を抽出した。以下 0 内は使用回数を示す。

抽出された全単語のうち、対象の約半数が使用したとされる 23 語以上出現した単語は、【思う(36)、考える(35)、感じる(35)、授業(33)、よる(33)、高齢(30)、いう(29)、高齢者(27)、ある(27)、分(26)、ない(24)、自分(24)】の 12 語であった。対象の約 4 分の 1 の使用にあたる 11 個以上の頻度で出現した単語は、上記に加え【なる(21)、生活(21)、生きる(20)、身(20)、喪失(20)、人(18)、聞き取り(18)、老化(17)、身体(16)、祖父母(15)、人生(14)、知る(13)、喪失体験(12)】の 13 語だった。

3. エイジズム変化別単語間の関係性

対象者の 4 分の 1 にあたる 11 語以上の頻度で出現した 25 語において、FSA 上昇群、減少群との群ごとに、それらの単語同士の結びつきをコレスポンデンス分析を用いて検証した。図 1(FSA 減少群)、図 2(FSA 上昇群)では単語を列とする列スコアの布置図における各単語間の関係性を表現している。コレスポンデンス分析では、行および列間のカテゴリー間の距離が近いほど、項目間の類似性は高くなる。

グラフ上で明らかに近く位置する単語同士を見ると、FSA 減少群において【生活 - 人生】の類似性が高いことが見て取れた(図 1)。また、コレスポンデンス分析では次元 1 と次元 2 の原点より遠くに位置するものほど、少数派であることを示す。これにより原点からの距離より、FSA 上昇群において、「人生」や「生活」という語は少数派であることが見て取れた(図 2)。

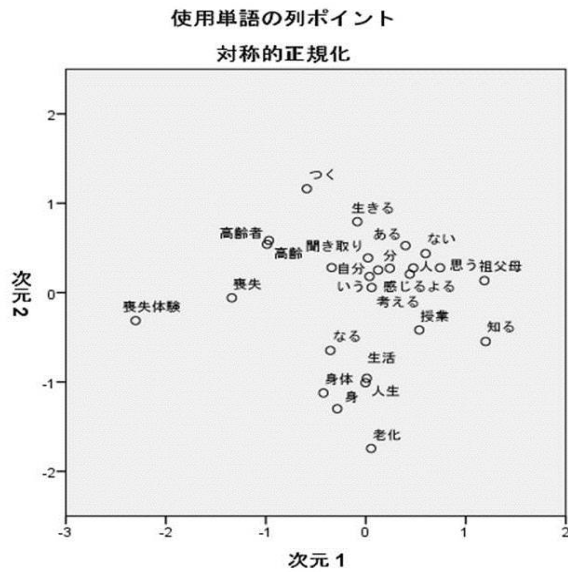


図 1. エイジズム減少群における単語の布置図

考察

1. エイジズム変化別単語間の関係性

FSA 減少群において【生活 - 人生】の類似性が高いことが示唆された。「生活」という単語を含む学びの内容を見てみると、「できなくなったことが多くなっても、日々の生活の中に楽しみを見出している」や「日々の何気ない生活の中に、幸せを見出すことのできる強さを持った人だと思った」、「活動的な生活を送っている」、「私も祖母のような生き生きとした生活を送りたい」などの内容であった。大石ら³⁾は健康レベルの高い高齢者と接することで、看護学生は高齢者の活動性や積極性といったプラスイメージを持つことができると述べている。本研究においても、聞き取りを行った対象者は、病院で入院中の高齢者ではなく、在宅で生活を送られている健康レベルの高い高齢者である。その健康な高齢者から、加齢に伴う喪失体験を抱えながらも、それらを受け入れ日々の生活に楽しみや、幸せを見出しながら生き生きと生活している姿に触れたことが、学生の FSA を減少させる一因になったのではないかと考える。また「喪失体験」という単語が、FSA 上昇群において FSA 減少群よりも布置図原点近辺にあり、出現頻度が多数派であることが見て取れた。加齢に伴う喪失体験について学びを深めることが、高齢者

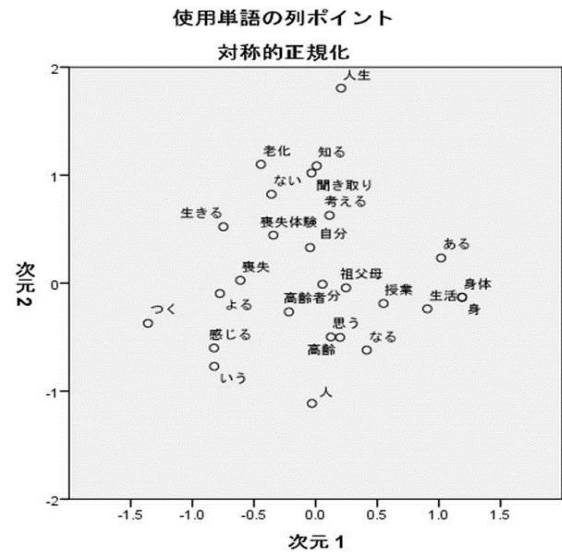


図 2. エイジズム上昇群における単語の布置図

の否定的な側面について学びを深めることに繋がり、それが FSA 上昇への一因となったと考えられる。岡本ら⁴⁾は高齢者の否定的なイメージのみではなく、高齢者のできる力に着目し肯定的な側面をさらに広くとらえられるように高齢者と実際かかわりが持てる単元を企画する必要があると述べている。「喪失体験」という否定的なイメージのみではなく、それらを乗り越えて生活を営んでおられる部分まで聞き取りを行い、学びを深めることが、エイジズムを排し、高齢者の強みの理解をより深める事につながると考えられる。

次に「人生」という単語を含む学びの内容を見てみると、「今の若い世代よりもずっと元気で、人生を楽しんでいる」や「高齢者はまさに人生の先輩であり、私たちには到底思いつかないような多くの経験や知識を持っている」、「長い人生の中で、様々な経験をし、様々なことを感じてこられたことが分かった」、「大きな喪失の体験を乗り越えて新しい生活へと向かっている姿勢が見られ、多くの人生経験をしている人なりの余裕が感じられた」などの内容であった。岩井ら⁵⁾は、臨地実習において学生の持つ高齢者イメージを肯定的に変化させた要因の一つに、高齢者が生きた時代を理解したことがあったと報告している。本研究において、学生は、高齢者から今

までの長い人生の中での、様々な経験を聞き取る中で、高齢者の人生の深み、高齢者の強みに触れ、それに感銘を受けていた。高齢者の長い人生経験を理解することが、高齢者の強みを理解することに繋がり、FSAを減少させる一因になったと考えられる。

高齢者の【生活・人生】について学び深めることは、高齢者の今まで生きてきた人生を理解し、それを礎として成り立っている現在の生活を理解することに繋がっていた。この学びの中で、老化による喪失体験という否定的な側面だけではなく、高齢者の強みという肯定的な側面に触れ、学生は自身の高齢者観を変化させたと考える。

2. 今後のライフインタビュー課題教授方法

今回のインタビュー聞き取り課題提示方法としては、1)今までの人生の中で、嬉しかったこと楽しかったこと、自慢に思っていることについて、2)加齢によってできなくなったこととそれに対する思い、3)日々の生活の中での楽しみ、4)健康について気を付けていることの4点であった。本研究の結果より、高齢者の【生活・人生】についてより深く聞き取りを行い、直に高齢者の強みに触れることが、学生のエイジズムに影響することが示唆された。このことにより、高齢者の人生について、学生一人一人が深く聴き取りができるよう、時系列に昔のことから経験や当時の思いを聞くことや、それらを踏まえて、今現在の生活をどのように捉えているのか、生活を送る上での工夫点などを聴き取るよう課題提示を工夫することが、高齢者を肯定的に捉え、強みを理解することに繋がり、FSAを減少させる一因となると考えられる。

研究の限界

本研究の対象者は、47名と少なく、FSA変化別に群分けを行った際、減少群33名、上昇群14名と

母集団に偏りがあり、それがデータのばらつきに影響を与えている可能性は否定出来ない。

結論

本研究において以下のことが示唆された。

1. 高齢者の【生活・人生】について学びを深めることが、高齢者の強みを理解することに繋がり、学生のエイジズム変化に影響を及ぼしていた。
2. 高齢者の生活や、今までの生きてきた人生について深く聞き取りを行い、高齢者の強みに直に触れることが出来るよう、ライフインタビュー課題提示時に聞き取り項目等の工夫の必要性が示唆された。

謝辞

研究にご協力いただいた学生の皆様に感謝いたします。

文献

- 1) 内閣府:平成24年度版高齢社会白書. 2013-08-20
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/s1_1_1_01.html
- 2) 近藤ふさえ, 丸山昭子:看護学生の高齢者とのかわり体験と高齢者イメージとの関連性. 日本医学看護学教育学会誌, 13, 8-25, 2004.
- 3) 大石和子, 蒔田寛子:高齢者へのプラスイメージを形成する老年看護実習の検討. 第35回日本看護学会抄録集 看護教育, 50, 2004.
- 4) 岡本麗子, 榊原千佐子, 小堀ゆかり:老年看護学における看護学生がとらえた高齢者イメージの変化. 北海道文教大学研究紀要, 7(2), 4-8, 2011.
- 5) 岩井恵子, 森永聡美:臨地実習が高齢者イメージに及ぼす影響の分析. 関西医療大学紀要, 5, 54-63, 2011.